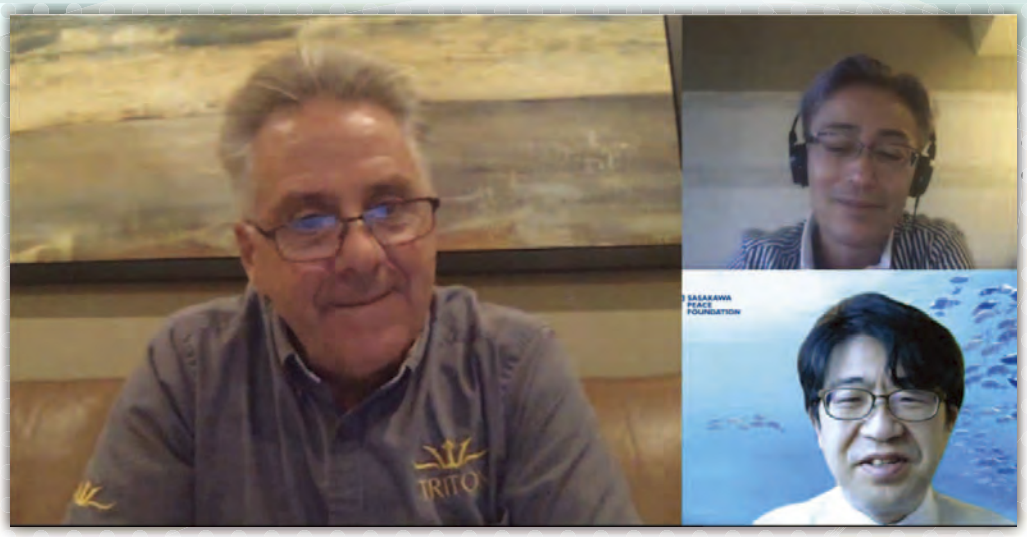
巻頭特集

新しい海洋科学の10年
民間による深海深査への挑戦

巻頭特集　新しい海洋科学の10年

民間による深海探査への挑戦

Toward Private Deep Sea Explorations



パトリック・ラーヒィ：トライトン・サブマリン社社長（左）
Patrick Lahey：President, Triton Submarines LLC
トライトン・サブマリン社（Triton Submarines、以下「トライトン社」）は研究、撮影、深海探査、豪華ヨットおよび観光セクター向けの民間潜水艇を設計および建造を行う、フロリダに拠点を置く会社。社長のラーヒィ氏は2007年の創業メンバーでもある。

インタビュワー
高井　研：（国研）海洋研究開発機構
超先鋭研究開発部門部門長
（右上）
角南　篤：（公財）笹川平和財団理事長
（右下）

角南　篤

―― 本日はありがとうございます。パトリックさんには、どのように深海に挑戦する感動を提供し、それをイノベーションに結びつけているのか、多くの若い人たちに起業を促すにはどのようにすればいいかをお聞きしたいと思います。日本では宇宙の分野でトライトン社のようなベンチャー企業が見られ始めています。個人的には海洋の分野でもっと活発に起業が行われることを望んでいます。そこで、パトリックさんには、日本の読者に何があなたを駆り立てるのか、深海への挑戦の何がそんなにエキサイティングなのかをお聞きしたいと思います。

高井　研

―― トライトン社には2年前に伺ったことがあります。パトリックさんにはお会いする機会はありませんでしたが、バハマで潜水艇に乗船しました。私は微生物学者で深海熱水噴出孔を専門にしており、最近のトライトン社の進歩には感銘を受けています。昨年、トライトンの潜水艇「リミティング・ファクター」は世界で初めて5つの海溝の最も深い場所まで潜ることに成功されましたね。今日のインタビューを非常に楽しみにしています。

パトリック・ラーヒィ

ありがとうございます。『海洋白書』の巻頭インタビューに参加させていただいて光栄です。まず、私は「海」の熱心な支持者であり、とても海を愛しています。子供のころから変わりません。たまたま、皆さんのような方々が海洋を探検するのに利用できるマシンを作っただけです。私は潜水艇を作るのが仕事であり、科学者ではありません。エンジニアでもありませんが、角南博士や高井博士のような人が中に乗って、海洋を探検し、リアルタイムで観察することのできる有人潜水艇は実のところ海洋への支持層を作るうえで重要だと信じています。

海洋の魅力を伝え、人を惹きつけるために重要なのは、ドキュメンタリーを制作し、ビデオ映像を撮影し、トライトン社の潜水艇に乗って深海に潜る機会のない人たちに「海の物語」を伝えることです。海に関心を持ってもらい、海を支持し、海に関わりあってもらうためには、海の物語を語ることが素晴らしい方法だと思います。若い人たちが、

7
TRITON

エンジニアでも、科学者でも、探検家でも、それぞれの人が海に関わるキャリアを考える環境をつくるために、最良の方法は海が自分にとってどうして重要なのかについての説得力のあるコンテンツを制作することです。私たちは「海洋コミュニティ」で生活し、働いています。私たちは皆、海洋が地球の生命維持システムであり、海洋に依存していることを知っています。日本のような海に囲まれている島国は特にそうだと思います。

私が世界で一番好きなのは海です。この情熱と海に対する愛を分ち合える人と話ができるなら、いつでも参加したいです。

角南

―― ありがとうございます。それではまず、トライトン社の歴史について教えていただけないでしょうか。

ラーヒィ

私たちは2007年に起業しました。最初に建造した潜水艇は2人乗りで潜水深度300メートルのものでした。それ以来、会社は成長を続け、科学者や探検家向けに、そしてレクリエーション用に潜水艇を作ってきました。この期間にいくつかの重要な進歩を遂げました。私たちは非常にエキサイティングな時代に生きています。素材技術や電源システム、ソフトウェアの発展により、10年、20年前はもちろん、5年前にさえ想像もつかなかったことができる潜水艇を作ることができました。

私は18歳の時に作業ダイバーとして働き始め、21歳のときに潜水艇に乗る仕事を始めました。石油・ガス開発業界で潜水艇が使われなくなった時には非常にがっかりしました。1980年代にほとんどの作業が遠隔操作艇（ROVなど）にとって代わられたのです。先にお話ししましたように、人間が現場に赴くこと、自分の五感を使ってものを見て、情報を吸収することに強い思い入れがありました。これは海洋における強力なツールなのです。

会社を始めたときには、プライベートヨットに搭載する潜水艇を作ることを意図していました。ヨットの展示会に足を運び、ヨットは潜水艇にとって素晴らしいプラットフォームになるというアイデアを売り込もうとしました。ヨットオーナーは概して海に関心があります。多くの場合、ダイバーでもあり、資金とサポート技術を持っています。そこで、ヨットとヨットオーナーと潜水艇は相性が良いと考えたのです。

最初に引き渡した潜水艇2基は純粋にレクリエーション用でしたが、これらも2011年に科学調査プラットフォームとして使用されることになりました。そして、初めての潜水深度1,000メートル、3人乗りのアクリル球体の潜水艇を建造しましたが、これは当時建造された最大のもので、最も厚いアクリル球体でした。この潜水艇が海洋環境の